

## 時間・民俗との出会い

丸田孝志

博士課程を終えて日本の大学に職を得るまで韓国で仕事をしていた私は、広島に戻る度に中国帰国者の子女である妻の実家の温かいもてなしを受けていた。1940年代の中国共産党の政治史を対象として革命の負の側面を描く研究に行き詰まりを感じていた当時、妻の家族・親族との家族ぐるみの付き合いは、外からはなかなかわかりにくい人間関係や独特の生活感覚に触れる機会を提供してくれた。そのような生活の中で、義母が「今日は立春だから、外に出るのはよくない。」と語っていたことが、民俗を対象とする私の政治史研究のきっかけとなった。

中国には、現在でも生活の様々な場面に伝統的な暦(農暦)の時間が息づいており、近代以降の時間とは異なる独自のリズムを刻んでいる。農暦の時間に根付く慣習・信仰の感覚を多少とも経験する中で、これまで扱ってきた中国政治史の史料を伝統的な時間のリズムで読んでみたら、意外な発見があるのではないか、という思いつきが生まれた。学生の頃、読んでいた西洋社会史の本の中では、近代とは異なる中世の宇宙観や時間意識について紹介されていたが、中国の時間は現在でも独自の社会の時間が力をもっており、その意味でも中国の時間の民俗と近代政治の関係を考察する作業は、魅力的なものに思えた。そのような単純な動機で、日中戦争期の中国共産党の機関誌などを、地域の民俗を記した地方志と新旧暦対照表とをてがかりに丁寧に読み込むことから研究に着手した。

当時は、民俗、時間、象徴などに関わる中国近代史の成果は少なく、社会史的な手法は、主に日本史、西洋史の成果から学んだ。その中でも、民俗に基づく集合的心性と政治運動との関わりを論じたフランス史の研究が、問題を考える上で参考になった。研究を進めていくうちに、共産党が行った新暦の記念日の集会や動員大会が、節句の時間や民俗に関わる重要な場所を利用して展開しており、これらが特定の時間と場所に込められた人々の集合的な

意識、信仰を巧みに取り込もうとしていたことがわかってきた。革命史研究隆盛の時代に読み尽された感のある機関誌から、民衆の農曆の時間のリズムが再発見されたことには、若干の高揚感があった。無味乾燥に見える政治動員の記事も、時間と場所に関わる民俗が理解できれば、そこから、民俗・信仰を通じて政治目的を達しようとする権力と、これを別の文脈で解釈する民俗とがせめぎあう状況を見ることもできるのである。このような研究から更に進んで、近代的な象徴と民間信仰との関係、烈士追悼儀礼と葬送の民俗との関係、そこに見られる政治と民俗との矛盾、中国の政治と文化の関係などに興味と関心が広がっていった。地方レベルの新聞や農村幹部用の新聞は、その頃から次第に利用が可能になってきていたが、これらの史料には、地域の民俗と向き合う権力の、意外と率直な語り口が更に多くちりばめられている。このような新聞史料の独特の面白みが、研究の励みとなった。

地域研究には、地域独自の論理によって国家の枠組みを相対化する社会の視点があり、それが魅力の一つであると思う。地元の民俗や信仰から政治史を読み直すという作業も、地域研究のひとつの手法に含まれてもよいだろう。しかし、私のように政治史研究において地域を取り扱う者は、その魅力と同時に、ある種の難しさを常に感じている。広大で多様な地域から構成される中国において、個々の地域研究が進展するほど、政治の動きを説明する統一的な解釈は成り立たなくなり、多様な地域を巻き込んで起こった革命のような大規模な政治変動を説明し難くなるからである。現在の研究を始めた頃、「そんなことをやっていたら、地方史研究になってしまう。」というコメントを頂いたこともある。

私の当面の課題は、国家の枠組みを相対化するマクロないしミクロな地域研究の有用性を確認しつつも、地域の多様性と権力との多様な関わりを前提としながら、そこに立ち上がる国家権力の性格を改めて説明していくことであろうと考えている。言うのは簡単だが、ひとつの地域の研究すら一人の研究者の一生をかける仕事となりかねない。しかし、中国人研究者が様々な制約から益々自由になり、実証においても更に高い水準の成果を生み出している現在、外国人が中国人と同じ志向性と質をもって地域研究にどっぷりとつかるべきこともできないだろうし、またそのようなことをすべきでもない

思う。外国人による地域研究は、地元の人々が地元のために行う研究とは別の問題設定を求めなければならず、そこに独自の意義をもとめなければならない。地域の民俗の視点を十分に活かした上で、更に進んで中国の政治と文化の関係を捉え直すという方向が、自らの研究の道筋であろうと考えている。